

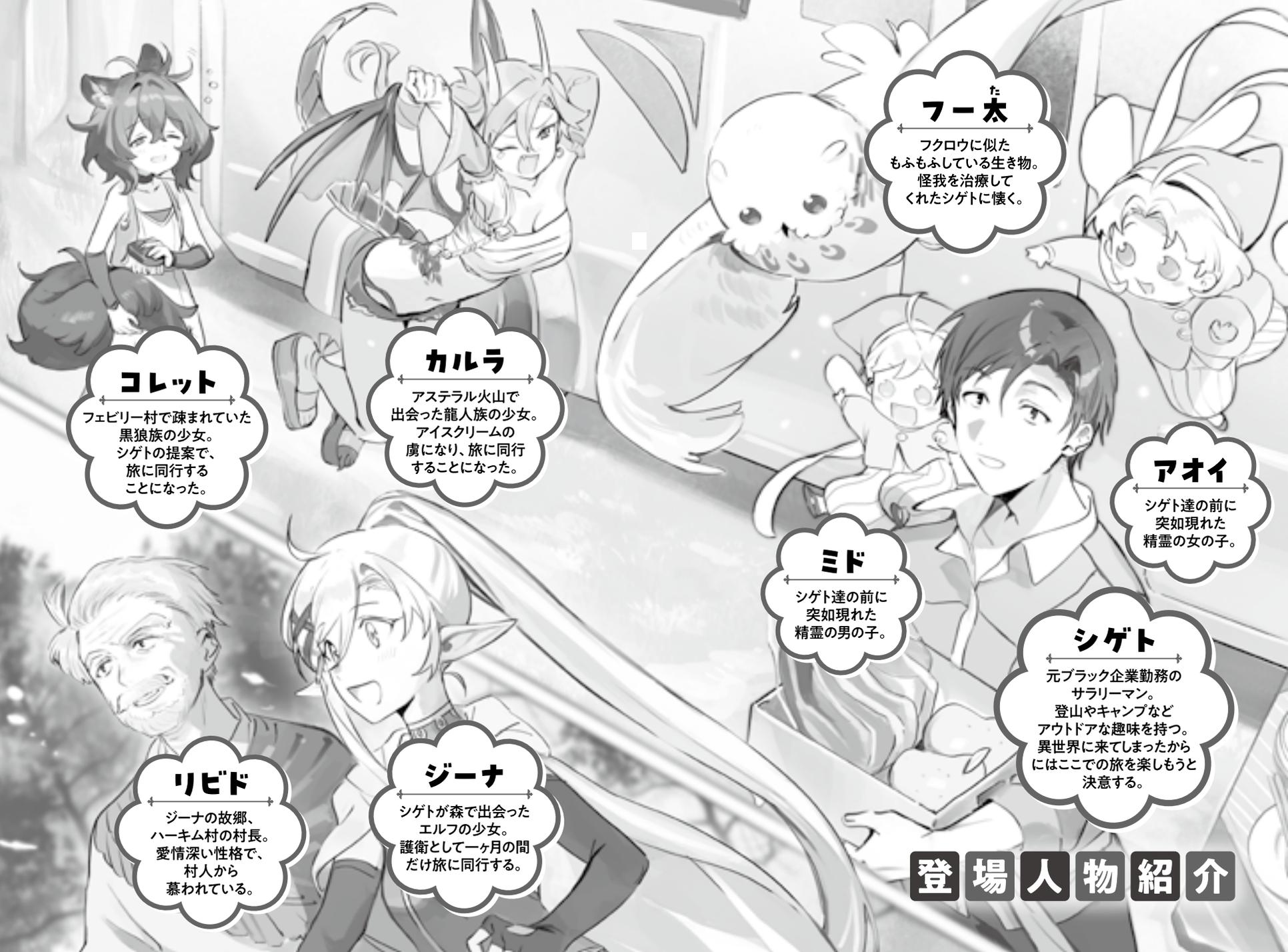
キャンピングカー³で往く
異世界 徒然紀行

3

著 タジリュウ

絵 嘴広コウ





コレット

フェビリー村で疎まれていた
黒狼族の少女。
シゲトの提案で、
旅に同行する
ことになった。

カルラ

アステラル火山で
出会った龍人族の少女。
アイスクリームの
虜になり、旅に同行
することになった。

フータ

フクロウに似た
もふもふしている生き物。
怪我を治療して
くれたシゲトに懐く。

アオイ

シゲト達の前に
突如現れた
精霊の女の子。

ミド

シゲト達の前に
突如現れた
精霊の男の子。

シゲト

元ブラック企業勤務の
サラリーマン。
登山やキャンプなど
アウトドアな趣味を持つ。
異世界に来てしまったから
にはここでの旅を楽しもうと
決意する。

リビド

ジーナの故郷、
ハーキム村の村長。
愛情深い性格で、
村人から
慕われている。

ジーナ

シゲトが森で出会った
エルフの少女。
護衛として一ヶ月の間
だけ旅に同行する。

登場人物紹介

第一章 準備していたもの

「すっげ〜！ このキャンピングカーってやつの中はこんなふうになってんのか！」
「この中で快適に生活できるようになってるんだよ」

俺——吉岡茂人は日本からこの異世界へとやってきた。だが、俺はこの世界へ裸一貫で来たわけではない。

長年の夢であったキャンピングカーを購入し、オートキャンプ場で初めてのキャンピングをしていたら、キャンピングカーごとこの世界に来てしまったのだ。

これまでに散々危険な魔物に遭遇してきたが、このキャンピングカーと、一緒に旅する仲間達とで力を合わせて切り抜けてきた。

今、キャンピングカーの中を見て驚いている女の子の名前はカルラ。燃え盛る炎のような真っ赤な髪を横で一つに束ね、頭からは白い角が二本生え、背中には一對の翼がある。

彼女は龍人族という珍しい種族で、一人ですっというんな場所をまわっていたらしいが、アステラル火山で俺達と出会い、こうして一緒に旅をすることになった。

彼女がキャンピングカーに乗るのはこれが初めてになるので、いろいろと説明をしてあげない

とな。

「カルラはよくそれほど楽しそうにキャンピングカーの中に入れましたね……」

カルラの隣にいるジーナは、まばゆい白銀色の髪をポニーテールにしており、エルフ特有の長く尖った両耳が突き出ている。

「僕も最初はちよつと怖かったかな……」

くせのある黒い髪とオオカミのような耳が生えた少女のコレットちゃんは、じゅうしん獣人でくろいろうどく黒狼族という種族だ。腰の辺りからは髪と同じ黒色のもふもふとした尻尾が生えている。

「ホー」

そして、定位置である俺の右肩に留まっている真っ白でもふもふしているのは、もり森フクロウという種族のフー太。真っ黒でつぶらな瞳、胸にある黒色の紋様は、元の世界のフクロウとは異なる証だ。まあ、体の大きさを変化させることができるフクロウなんていなかったもんな。

「シゲト、こいつはなんなんだ？」

「これは冷蔵庫という道具だよ。ほら、この中は冷えていて、食料なんかを入れておけるんだ」

「うおつ、確かに冷たいぜ。すげーな！」

初めてキャンピングカーの中に入るカルラはとても楽しそうだ。うん、本来キャンピングカーに入った時はこういうワクワクとした気持ちになるもんだよな。

車を見たことがないこの世界の住人には、大きなキャンピングカーは魔物に見えるらしいから、

ジーナの時みたいに覚悟が必要というのわからなくはないけれど。

「とりあえず人目につかない場所まで移動して、ドラゴンを解体しようか。そのあと街でドラゴンの素材が売れるかを調べてみよう」

俺は今後の行動をみんなに伝え、出発の準備を整える。

俺達が今いるのは、アステラル村から少し歩いたところ。

観光に来たアステラル火山で、運悪くレッドドラゴンと遭遇してしまい、命がけで戦って勝利した俺達は、一晩休息をとり今朝村を出発した。

キャンピングカーを見られない場所まで来てから、みんなで乗り込む。

「それじゃあカルラは……後ろの椅子に座ってくれ。コレットちゃん、カルラにシートベルトの締め方を教えてあげてね」

「うん！ カルラお姉ちゃん、シートベルトはこうやって締めるんだよ」

「へえ、体を押さえる紐か。おおつ、引っ張ると伸びるんだな」

後部座席にはコレットちゃんとカルラ。運転席には俺、助手席にはジーナとジーナに抱き抱えられたフー太。これからはこの乗車位置で進んでいくつもりだ。

俺はカーナビを操作して次の目的地を考える。

ハーキム村を出てから約半月が過ぎた。そろそろジーナを村まで送り届けることを考えて、ハーキム村に戻ることも視野に入れて目的地を決めなければならない。

ここから東の方へ進むと川があつて開けた場所があるから、まずはそこを目指すでしょう。そしてそこからさらに東へ進むと、ノクターラの街というそこそこ大きな街があることはアステラル村で教えてもらった。そこでドラゴンの素材が売れるかを確認して、いろいろな物資を補給するでしょう。

『目的地が設定されました。目的地まで案内を開始します』

「うおっ、誰だ!？」

「カルラ、今のは道を案内してくれる声だから、あまり気にしなくて大丈夫だよ」

初めてキャンピングカーに乗った人がカーナビの声に驚くのは、この世界では毎度のことである。

「よし、それじゃあ出発!」

「ホホー!」

アクセルを踏むと、キャンピングカーがゆつくりと進み出す。

「うおおおお! すげえ、こんなにデカいのが走ってるぜ!」

「カルラお姉ちゃん、あんまり身を乗り出すと危ないよ!」

後ろからは窓の外を見てはしゃぐカルラと、それを止めようとするコレットちゃんの声が聞こえてくる。新たな同行者が増えて、旅がまた楽しくなりそうだ。

「よし、無事に到着つと。特殊機能の【透明化】も発動しておこう」

三時間ほど走って、カーナビで設定していた目的地に到着した。

川のほとりで近くには何も無い。キャンピングカーの透明化を発動したから、魔物などがキャンピングカーを見つけて寄ってくることもないだろう。

「次のレベルアップまでは残り九百キロメートルか。まだまだ先は長いなあ」

「新しい道を通ったら、どんどん快適になるなんておもしろいな」

カルラには道中で、このキャンピングカーの拡張機能や、レベルアップで得られる特殊機能のことを明かしてある。すでに獲得してある拡張機能や、現在キャンピングカーがレベル2であることなんかも説明した。

透明化のような便利な特殊機能を早く増やしたいところではあるけれど、この世界の路面状況はあまりよくないから、それほどスピードは出せない。レベルアップの方は焦らず、安全運転を心掛けていこう。

「さて、ドラゴンの解体作業をする前に、まずは昼食にしよう」

解体作業をするとベトベトの血と臭いが染みつくことはすでに経験済みだ。先に昼ご飯を食べてから、解体用の汚れてもいい服に着替えて作業に取り掛かることにする。

いよいよドラゴンの解体作業を始める。

ちなみに昼食はお手軽なホットサンドにした。やはり簡単にできておいしく、中身をいろいろと変更できるホットサンドは旅に最適である。

みんな食後にアイスクリームを食べたがっていたけれど、さすがに朝昼晩でアイスクリームを食べていたら間違いなく太る。そのため、基本的にアイスクリームは晩ご飯のあとに少しだけ出すことに決めた。

カルラは特にながかりしていたけれど、移動はキャンピングカーだし、カロリーの高いアイスクリームはほどほどにしないとほけない。

「……改めて見ても大きいな。これで子供だつていうのだから、大人だつたらどれだけになるんだか」

あまりの迫力に、つい吹きが漏れる。

「ホー……」

「よくこのドラゴンを倒せましたね……」

フー太とジーナも、改めてその迫力に驚いているようだ。

俺達の目の前には、昨日倒したレッドドラゴンの遺体の一部がある。もともと、爆発で黒焦げになった部位や内臓は置いてきたから、これでもだいぶ小さくなっている。

「まずは食用になりそうな部位を切り出して、アイテムボックスに収納していこう。そのあとは売

れそうな鱗や爪や牙なんかを順番に少しずつ分けていこうか」

俺はみんなに簡単に流れを伝える。

「おう。ドラゴンはとんでもなく旨いらしいから楽しみだぜ」

そう、カルラの言う通り、ドラゴンは食べることができるらしい。

ドラゴンの肉にはとても興味はあったが、あの恐ろしいドラゴンを目の前にした時はそんなことを考えている余裕はなかった。どうやって逃げるかを考えるだけで精一杯だったからな。

だが、いざドラゴンを倒したとなると、その肉の味には興味しかない。やはり異世界へ来たのなら、ドラゴンの肉は一度食べてみたかった。

ちなみに、龍人族であるカルラがドラゴンを食べることは共食いにはならないらしい。まあ、カルラにはドラゴンらしい特徴もあるけれど、明らかに別種族だよなあ。

とりあえずざっくり切り分けようと包丁を当てるが、うまく刃が入らない。

「皮がだいぶ硬いな。包丁じゃうまく切れないぞ」

「おっ、それなら俺に任せてくれ」

そう言うってカルラは自分の爪を伸ばし、その爪を器用に使ってドラゴンの肉を切り分けていく。カルラの爪は伸縮自在で、かなりの切れ味があるみたいだ。

「助かるよ。それじゃあ、肉の切り分けはカルラに任せて、俺はアイテムボックスに収納していくか」



入れた物の時間が経過しない便利な『アイテムボックス機能』だが、俺しか扱うことができないから、カルラが細かく切り分けてくれたドラゴンの肉を収納するのは俺の役割だ。

「カルラ、こちらの方もお願いします」

「おう、任せておけ」

ジーナは持っているロングソードを使って、ドラゴンの体を大きく切り分けてくれる。彼女が持つロングソードはドラゴンの首を切断できるほど鋭く、鱗も切ることができるようだ。

ジーナが大きく切った部位をカルラが細かく切り分けて、俺が収納するという役割分担だ。

「シゲトお兄ちゃん、こんな感じで大丈夫？」

「うん、いい感じだね。肉を切り分けたら俺達も手伝うから、それまでよろしくね」

「うん」

コレットちゃんには、持っているナイフでドラゴンの鱗を一枚ずつ剥がしてもらっている。魚の鱗のように包丁で一気にできればよかったのだが、ドラゴンの鱗は一枚一枚が大きく、結構な力を入れる必要があるため、ナイフを使って一枚ずつ剥がしていくしかない。

ドラゴン用の鱗取りが欲しいものである。元の世界のゲームとかでは魔物を倒したらボタン一つで簡単に素材を手に入れることができるけれど、現実はどうして魔物を解体して、素材を自分達で採取していくしかない。

「ホーホー」

「フー太、あんまり遠くに行っちゃ駄目だよ」

「ホ〜♪」

フー太には俺達が解体作業をしている間、周囲に魔物が近寄ってないかを見張ってもらっている。ドラゴンの血の匂いに誘われて魔物が寄ってくる可能性もあるからな。

空から周囲を見張ってくれると俺達も安心できる。それにウサギなんかの小動物がいたら狩ってくれる。

「……よし、半日でほとんど終わったな。やっぱり人が増えると作業はその分楽になるね」

「ホーホホー♪」

「ええ、カルラがいてくれたおかげで、だいぶ楽でした」

「カルラお姉ちゃん、すごかったね！」

「いやあくそれほどでもねえよ。それに俺はちまちました作業が苦手だから、そっちの方は助かったぜ」

無事にドラゴンの解体作業が完了した。以前に解体したダナマベアよりも大きな体をしていたが、カルラが加わったこともあって、予想よりも早く終わってくれた。

鱗の方も綺麗に剥がすことができたし、適材適所で作業をするのが一番効率がいい。

「それじゃあ、順番にシャワーを浴びて、晩ご飯にしよう」

「うおおお、こいつは気持ちいいな！ 温かいお湯が毎日使えるなんて最高だぜ！」

「カルラお姉ちゃん、狭いからあんまり動いちゃ駄目だよ」

……カルラのやつはだいぶ声がでかいな。キャンピングカーの外にいるのに、シャワー室の中の声が聞こえてくる。

まあ、初めてキャンピングカーのシャワーを浴びた時は、ジーナもコレットちゃんもだいぶ驚いていたか。

「とてもいい香りですね。晩ご飯がとても楽しみです！」

「ホホ〜♪」

「うん、それに焼いてみたらだいぶ柔らかくなったからね。どんな味がするのか楽しみだよ！」

先にシャワーを浴びた俺とジーナとフー太は、キャンピングカーの外で晩ご飯の準備をしている。今回使用する肉はドラゴンの腰周りの部位だ。牛に照らし合わせるのならサーロインになる。

ドラゴンの肉は牛肉よりも鮮やかな赤色をしていて、純白のサシが入っていた。見た目は、非常に美しい肉である。

肉質は少し硬めで包丁を入れるには力が必要だったが、試しに一欠片だけ焼いてみると、その肉はとても柔らかくなった。これくらいの柔らかさなら、タマネギのみじん切りに漬けるなどの柔らかくする処理は必要なさそうだ。

ドラゴンといえば、まずはあの料理を作らなくちゃな！

「お待たせ、今日の晩ご飯は、ドラゴンステーキだよ」

「んっ、これが肉なのか？ 銀色で綺麗だけれど、全然旨そうじゃねえぞ……」

「カルラお姉ちゃん、これはアルミホイルっていつて、この中にお肉が入っているんだよ」

他のみんなはダナマベアのステーキを食べた時にアルミホイルを見たことはあるが、カルラは初めてだったな。

スキレットを熱して牛脂ぎゅうじならぬドラゴン脂を引いて、ドラゴンの肉の両面を炭火で一気に焼き上げる。そしてアルミホイルに包んでしばらく置いた。こうすることにより、肉の中心部までじんわりと加熱され、少しレアな状態で食べることができる。

「おっ、確かに中から肉が出てきたな。こりゃあ旨そうだぜ！」

「ええ、これはとてもおいしそうです！」

「ホ〜♪」

アルミホイルの中には綺麗な焼き目をしたドラゴンステーキ。カルラもジーナもフー太も、キラキラした目で見ている。そして、香ばしく焼けた肉の香りが辺りに広がっていく。

これは我ながらうまく焼けたみたいだ。

「まずは肉の味を味わうために軽い塩コショウで食べてみよう」

いつも通り、まずはシンプルに塩コショウのみで味わう。アウトドアスパイスやソースなどで食べるのも間違いないおいしいのだが、肉本来の味が一番わかるのはこれである。

ナイフをドラゴンステーキに通すと、スツと肉が切れていく。

肉の断面にはまだ少し赤さが残っている。さて、味の方はどうかな。

「うん、中から旨みの凝縮された肉汁が溢れてくるな！ 牛や豚、それにダナマベアよりもさらに一段上の味だ！」

噛み締めた瞬間、熱々の肉汁がジュワツと出てくる。外は香ばしくカリッと焼かれ、内側はとろけるような柔らかさで、濃厚な肉の旨みが舌の上に広がる。さらに、香ばしい脂の香りが鼻をくすぐり、思わず目を閉じてしまうほどの幸福感。噛むたびに溢れる旨みの洪水に心まで満たされていくようだ。

「すごい、今まで食べたどんなお肉よりもおいしいよ！」

「ええ、香りもすばらしいですし、想像よりも柔らかく、赤身と脂身が少しもどくなくて最高においしいです！」

「なんじゃこりゃあ！ ブレスで焼いた肉よりも遥かにうめえじゃねえか！」

「ホーホーホー!!」

みんなも今までで一番の反応だ。これはもう肉そのものの味が凄まじい。

どうしてあんなに凶暴そうなドラゴンの肉がこんなに旨いのか不思議でしょうがないが、今はた

だ、この瞬間にみんなと一緒にこの味を楽しめることに感謝しよう。

「次は別の味で食べてみよう。これはアウトドアスパイスという様々な香辛料が合わさっている**万能調味料**だよ。こっちはドラゴンステーキを焼く時に出た肉汁と調味料を合わせたオニオンソース、そっちはボン酢という調味料を使ったおろしだれソースだ。好きなものを使って食べてみてね」

カルラには初めてのものもあるので、軽く調味料の説明をする。

みんな早々にドラゴンステーキを平らげ、続いて二枚目のステーキを前にする。ステーキは時間差を付けて焼き上げ、アルミホイルで休ませている間に次のステーキを焼いてある。

たとお腹がいっぱいになって余ってしまったとしても、焼き立てのままアイテムボックスに保存できるのは便利だよな。

「おおっ、こっちの方がうめえぜ。肉にいろんな味が付いていやがる！」

「ええ。やはりこちらの香辛料を掛けると、どんな肉でもおいしく食べられますね！」

カルラにとってアウトドアスパイスの味は初めてだ。この世界は香辛料などがまだ高価だから、こういった味に出会う機会はなかっただろう。

「うわあ、こっちのソースもドラゴンのお肉にすごくよく合うよ。ソースだけでもとってもおいしいね！」

「ホホッ」

「うん、おろしだれソースもさっぱりとしていていけるな。しかし、どの味付けにも決して肉の味

が負けていない。やっぱりこの肉はすごいな！」

おろしだれソースは以前に作って保存してあったものだが、オニオンソースは今回ドラゴンの肉汁を使って作り直した。

味付けを変えるだけで、ドラゴンの肉の味わいがガラリと変わるが、どれも最高においしい。

「いやあく本当においしかったなあ。部位によっても味が違っていろいろと楽しめたよ。どれも好きだったけれど、俺は三枚目が好きだったかな」

ドラゴンステーキを食べ終え、片付けを終えてキャンピングカーの中でまったりタイムだ。

「ええ、どれも味が違いましたね。私は二枚目の味が好きでした！」

「僕はシゲトお兄ちゃんと一緒に三枚目が好きだった！」

「俺は最初のやつが気に入ったぜ！」

俺が肉の感想を言うと、ジーナとコレットちゃん、カルラも各々の好みを教えてくれる。

「ホホー！」

フー太は一枚目のようだ。右の翼だけを上げている。三枚目だったら、また以前みたいに両翼と片足を上げて表現していたのかな？

今回は三種別の部位を用意した。最初の肉は腰周りのサーロイン、二枚目が肩周りのロース、三枚目はお尻に近いランプ辺りの部位をステーキにしてみた。肉の部位によって、同じ個体から取れ

た肉でも味は全然違うものだ。

俺もそこまで肉の部位に詳しくないから、ヒレとかミスジとかの部位まではわからなかったな。そもそもドラゴンの肉を、牛の部位と同じように考えていいのかもわからないが。

「肉もソースも全部旨かったぜ。やつぱりシゲトは料理がうまいんだな！」

「ありがとう」

まあ、料理の腕というよりは、アウトドアスパイスや醬油にボン酢なんかの、元からこのキャンピングカーに積んでいた香辛料や調味料のおかげではあるが。

小さめに切ったとはいえ、みんな結局三枚以上のステーキを平らげた。カルラとジーナに至っては五枚も食べたんだからすごい。ちなみに俺とフリー太は食べなかったが、三人は食後のアイスクリームまでしっかりと完食していた。

ドラゴンは子供でもだいぶ大きかったから、まだまだ肉の量はある。まずは定番のステーキだったけれど、これだけ旨いなら他のいろんな料理も作ってみたくなる。カルラが増えたけれど、ダナマベアよりも遥かに肉の量が多いから、当分の間は楽しませてもらうでしょう。

「さて、素材の方はどうしようかな。カルラ、やつぱりドラゴンの素材ってかなり高価だったりするの？」

他のみんなはドラゴンという魔物自体知らなかったので、唯一ドラゴンを知っていたカルラに聞いてみた。

「かなり高価なものっていうのは聞いたことがあるぜ。冒険者ギルドに行けば高値で買い取ってくれるはずだ。でも、さすがに冒険者でもねえやつが、どうやってドラゴンを討伐したのかって話にはなるだろうな」

「やつぱりか。キャンピングカーで旅をしていることはあんまり知られたくないんだよね。どうやってドラゴンを倒せたかって聞かれたら、燃料のことを話さないといけなくなりそうだし……燃料のことがバレるとさすがにまずいんだよ」

百歩譲ってキャンピングカーという存在がバレるだけならまだいい。だが、燃料はだめだ。

というのも、燃料は香辛料や調味料のように『燃料補給機能』で、毎日増やすことができる。

ドラゴンを倒した時のように、燃料が強力な武器として使用できることが権力者達にバレてしまうと、俺は監禁されてひたすら燃料を生産する日々を過ごす、なんてこともあり得るかもしれない。「ドラゴンの素材はあんまり大事にならないように、少しずついろんな街で売っていくか。それなら商売をしながら旅をしている間に偶然入手したと言えるかな。あとはオドリオの街にあるエミリオさんに買い取ってもらえないか相談してみるのもありだ」

とりあえず、ノクターラの街へ行った時にドラゴンの素材がどれくらいの値段で売られているか確認してから決めるとしよう。今はまだダナマベアの素材と香辛料を売った時のお金が残っているし、それほど焦る必要はないからな。

「へえ〜こいつはおもしろいな！ それにすっげ〜柔らかいぞ！」

「本当にそこでもいいのですか。後ろで三人でも大丈夫ですよ？」

「おう、俺はこっちでいいぜ。むしろこっちが気に入った！」

今話しているのは、今晚カルラがどこで寝るかについてだ。これまではジーナとコレットちゃん
が後ろのスペースで寝ていて、俺とフー太が前のソファと簡易ベッドで寝ていた。

コレットちゃんはまだ小さいし、後ろのスペースでも十分に三人で寝られるのだが、どうやらカ
ルラは寝室の手前かつシャワーの前にある組み立て式のベッドがいいそうだ。

最近組み立て式ベッドでも十分過ぎるほど寝心地はいい。それに組み立て式のベッドってなん
だか秘密基地感があってワクワクする。

「どちらも試してみて、カルラの好きな方で寝るのがいいと思うよ」

「おう、そうするぜ」

さすがに乗車人数が五人になると少し手狭になってきた。

バスコンタイプのキャンピングカーじゃなかったら、かなり厳しいところだった。高かったけれ
ど、このキャンピングカーを購入して本当によかったな。



「ふあ〜あ……」

「ホホー」

「おはよう、フー太」

今日はフー太の方が早く起きていたらしい。相変わらずもふもふしていて癒されるなあ。

「すび〜すび〜」

「……カルラもよく眠れているみたいだな」

組み立て式のベッドの上からはカルラの寝息が聞こえてくる。

初めてのキャンピングカーのベッドだが、よく眠れているようで何よりだ。組み立て式とはいえ、
寝心地はこの世界のベッドよりもいい。

「それじゃあ、静かに朝食の準備をしようか」

「ホー！」

さて、今日はノクターラの街へ向かう予定だ。朝食を食べたら早速移動するとしよう。

「……よし、ちょっと早いけれど、今日はここまでかな」

「ホーホー！」

「シゲト、お疲れさまです」

「シゲトお兄ちゃん、お疲れさま」

「お疲れだぜ」

「みんなもお疲れさま」

朝からキャンピングカーで進み、今日は少し早めに移動を終了した。

ここからノクターラの街まではもう少しなので、明日は朝から街へ入るとしよう。

「今日はちよっと早く着いたし、以前に仕込んでおいたいろいろなものを試してみよう」

「んっ、なんか面白いことでもあんのか？」

「実はカルラと出会う前にいろいろと準備していたものがあるんだ」

「へえ、朝や昼みたいなの、旨い飯を期待しているぜ！」

ちなみに今日の朝ご飯は昨日解体したドラゴンの肉を使った生姜焼きで、昼ご飯はドラゴンの肉を野菜に巻いたものだ。やはりドラゴンの肉は本当に旨かった。

「片方はみんなにも手伝ってもらおうからよろしくね」

事前に仕込んでいたものは二つある。

一つは以前狩りをした時に手に入れた肉で作った、ワイルドディアとダナマベアのベーコンだ。二種類の肉を使用してソミュール液に漬けたものと塩に漬けたものの計四種類を一週間ちよっと冷蔵庫に入れておいた。それを昼食後に少しずつ流した水へ浸しておいた。

これは塩抜きといって、肉に染みこませた塩を抜いていく工程である。なぜ塩漬けにしたあとにいちいち塩抜きをするのか疑問に思うかもしれないが、多めの塩に漬けたあと水へ浸して塩を抜い

た方が肉に均一な塩味が付くらしい。

「……うん、そこまでしょっぱくなさそうだから、これでいこう」

きちんと塩抜きされているかを確認するため、肉を少しだけ切って焼いてから食べてみる。

これくらいの塩加減ならちよっどよさそうだ。この塩抜きした肉を燻製にする。

ちなみに今回は燻製をするための燻製チップも自作してみた。実は燻製チップの作り方は単純で、細かく切った木のチップを乾燥させるだけである。

木を細かく刻む作業は結構大変なのだが、そこはジーナがロングソードを使って一瞬で細かく刻んでくれた。

今回は燃やしてみても香りが強かった木を選んでみた。

「よし、こつちの方はこれでしばらく燻製しておけばオッケーだ。燻製の煙がちよっと目立つから、周囲には今ままで以上に気を付けよう。それじゃあ次はみんなで作るよ」

次に、もう一つ仕込んでいたものを使ってパンを焼く。

「シゲトお兄ちゃん、前は秘密って言うていたけれど、これはなあに？」

「それは天然酵母といって、パンをよりおいしく焼くためのものなんだ」

この世界のパンは大麦やライ麦のような、小麦粉以外の穀物を使って作られた黒いパンが主流だ。多少は生地を寝かせて発酵をさせているようだが、パンを柔らかく膨らませるための酵母は使っていないかった。

酵母を使って焼いたパンは消費期限が近いから、あえて硬いパンを作っている可能性はある。

とはいえ俺達にはアイテムボックス機能があり、いつでも焼き立てのパンが食べられるので、その辺りは気にしなくていい。

「いろいろな果物を水に浸けただけのようですが、本当にこれでパンの味がおいしくなるのですか？」

「えーっと、パンの味を変えるんじゃないやなくて、発酵の際に炭酸ガスを発生させてパンを膨らませて柔らかく……うん、できるかわからないし実際にやってみよう」

ジーナの疑問に答えたものの、仕組みを理解するのは難しいようで、少し説明しただけですでにみんな頭にハテナマークを浮かべている。

というか、俺も詳しい仕組みまではわからないし、実際に天然酵母を作ってパンを焼くのは初めてだ。元の世界で天然酵母を作ってパンを焼いてみようと思っただけで、手間と時間がかかるため、実行しなかったんだよな。

おいしいパンが焼けることを祈るとしよう。

天然酵母液を作っていた複数のビンを開けてみると、いくつかは腐ってしまっていた。

本当は温度を三十度前後で一定にすると酵母菌が活発になるらしいのだが、キャンピングカーで旅をしながらだとそれは難しかった。とはいえ、白い泡が出て発泡したものもあるから、うまくいってくれているといいのだが。

「まずは小麦粉に塩と砂糖を加えて、そこに水とこの天然酵母の液を混ぜたものを入れてこねるんだ」

「面白そうですね、私がやりましょう」

「僕もお手伝いする」

「俺もやるぜ」

「うん、いろんな種類で天然酵母の量を調整していっぱい作るからよろしくね」

レシピなんてないから、どの天然酵母がパンに合うのかや、適切な分量を確認する必要がある。そのためにそれぞれの生地は少なめに作って、とにかくいろんな種類を試していこう。

「シゲトお兄ちゃん、こんな感じ？」

「うん、そんな感じで生地をこねていってね」

「うん！」

コレットちゃんはその小さな両手でパン生地をこねていく。やはりこういうのはみんなでやると楽しいものだ。

「よし、さらにバターを加えたら生地をもう少し混ぜてね」

「うん！」

こねた生地に、ジーナがホワイトブルの乳から作ってくれたバターを加えてさらに混ぜていく。

「面白そうだな、早く俺もやってみようぜ」

「私もパンをこねるのは久しぶりですね」

さすがにキャンピングカーのテーブルは全員でできるほど大きくはないから、二人ずつ交代で生地をこねてもらっている。

ジーナはハーキム村でパンを作る手伝いをしたことがあるらしいので、いろいろとアドバイスをもらった。やはり経験者は頼りになる。

「——よし、生地はこんな感じでオツケかな。それじゃあ、今度は別の生地をカルラとジーナでやってくれるかな」

「おう、任せてくれ！」

「了解です！」

次の生地は天然酵母の種類と量を変えたものだ。おっと、忘れないようにレシピをメモしておかないとな。

「シゲトお兄ちゃん、このあとはどうするの？」

「このあとは発酵といって少し生地を休ませるんだよ。今回はキャンピングカーのオープンレンジに付いている発酵モードを使うよ」

「おーぶんれんじ？」

「ホー？」

そう、このキャンピングカーには最新式のオープンレンジが付いている。もちろんパンを焼き上

げることできるが、その前段階である発酵の時間もこれを使うことによって短縮することができるらしい。

初めて使う機能なので、オープンレンジの説明書を引っ張り出して読むとしよう。

この発酵モードは、オープン内部をパン生地の発酵が活発となる三十五〜四十五度ほどの温度に保つてくれる機能らしい。

ただ、一次発酵からこの発酵モードを使用すると、酵母菌が疲れてしまうと書いてある。一次発酵は常温だと五〜七時間くらいだから、今後は寝る前に生地をこねておいて、朝起きたら二次発酵をして焼成しやうせいという手順がよさそうだな。

今回はお試しということと、天然酵母の種類と分量を見極めるのが一番の目的なので、この発酵モードを使って時間を短縮するとしてしよう。

一次発酵が終わったら、少し生地を休ませてから二次発酵、そして、二百〜二百五十度くらいに温めたオーブンで十〜二十分くらいパンを焼く。当然この温度や焼成時間も生地やパンの大きさによるので、いろいろと試していかないとな。

「うおおお！ こりゃ旨そうな香りだぜ！」

「とつてもおいしそうだね！」

「ええ、パンもベーコンも本当においしそうです！」

「ホーホー♪」

ベーコンの燻製とパンの焼成が終わり、食卓にはたくさんのベーコンとパンが並ぶ。パンの方は順次焼き上げているから、少しずつ味をみていくとしよう。

それにしても焼き立てのパンの香りは本当においしそうだな。元の世界では焼き立てのパンを食べる機会なんてほとんどなかったから、本当に楽しみな。

「それじゃあ、まずはこっちのパンから食べてみようか。とりあえず見た目はいい感じで焼けているね」

「こんなにふわふわしていて柔らかいパンは初めて見ました。これが酵母というものの力なのですね」

ジーナは実際に作ったことがあるからか、みんなよりもパンの出来に驚いている。

このパンはレーズンのような果物を材料にした天然酵母液を使用して焼いたパンだ。いくつか作ってみた天然酵母液の中で、こいつが一番泡を出していたから期待できる。

もちろん、単純に泡がたくさん出ればいいというものでもないとは思うけれど、こねた生地はちゃんと膨らんでいたし、焼き上げたパンはこの世界のものより遥かに柔らかかった。

「うわあ、すっごくいい香りだね！」

「おう、すっげえ旨そうだな！」

コレットちゃんとカルラが、目を閉じて香りを堪能している。

パンを半分に分けると、中からは白い湯気と共に小麦の香りが漂ってくる。この世界の小麦粉は元の世界のように完全に真っ白というわけではないけれど、それでもめちゃくちゃおいしそうである。

「食感が変わるだけでこんなに味が変わるのは驚きだ！」

「っ!? いつも食べているパンよりも遥かにおいしいです！」

「うん！ 柔らかくて、とってもおいしいよ！」

俺自身とても驚いたけど、ジーナとコレットちゃんのテンションの上がり方は俺の比じゃない。

外側はパリッとしていて、中はもっちりとした柔らかい。細かい味でいえば元の世界のパンには敵わないかもしれないが、少なくともこちらの世界の硬いパンよりも明らかに旨い。

噛むたびに小麦の味が口の中へ広がっていく。

「こりやうめえな！」

「ホーホー♪」

俺以外のみんなの反応もいい。パンとはいえこれだけ味が違うとみんなが驚くのもわかる。

「少し面倒かもしれないけれど、いつものパンよりもこっちの方がおいしいから、パンはこれから自分達で作ろうか」

「ええ、賛成です」

「うん」

よしよし。パンはほぼ毎日食べるし、味の改良ができて何よりだ。時間は少ししかかるが、天然酵

母液は果物一つでできるからお金もほとんどかからない。これで食卓が豊かになるのは嬉しいところだ。

「……こっちのパンはあまり膨らんでいないみたいだし、そっちのパンは天然酵母液の元になった果物の味がパンに移っちゃっているな」

「全然味が違っておもしろいな。俺はこっちのパンの味が好きだぜ」

「ホホー」

天然酵母液の種類やパンに入れた分量によって微妙に味や柔らかさが違っている。カルラとフー太が選んだのはそれぞれ違う。パンだし、好みによって一番好きなパンは分かれそうだ。

もしかしたらオーブンレンジの発酵モードを使わずに発酵させたら、また味が変わるかもしれない。このパンでも十分においしいけれど、他の焼いたパンも試してみても、それぞれが一番おいしいと思ったパンのレシピを覚えておくことにしよう。

あと、今は基本的に失敗が少ない丸パンだけれど、他にもいろんな形のパンがあるからな。旅をしながらおいしいパンを焼く方法を模索もさくしていくとしよう。

「次はベーコンだね。こっちは時間がかかったぶん、うまくできているといいなあ」

ベーコンは一週間以上前から仕込んできたものだ。この世界では塩やコショウなどが高価なこともあって、ベーコン自体が少し高級品だ。

「うおっ、すげえ量があるじゃねえか」

「二種類の肉を、それぞれ二種類の方法で作ってみたからね。どれがおいしかったかあとで教えてね」

ワイルドディアとダナマベアの肉を、塩漬けにしたものとソミュール液に漬けたものの計四種類を用意してある。

おかげでキャンピングカーの冷蔵庫は肉でいっぱいになったが、肉以外はアイテムボックスに避難できたから助かった。

「少し厚く切ったベーコンの両面を軽く焼いてと……」

四種類のベーコンを皿へ載せる。こいつにアウトドアスパイスを掛ければ最高の酒のつまみになるのだが、まずは味をみるためにそのまま食べてみる。これがうまくいけば、今回手に入れたドラゴンの肉でもベーコンを作ってみるつもりだ。

「うわあ、すごい。どれもとってもおいしいよ」

「ええ、これはいいですね！ 普通に肉を焼いて食べるよりもおいしいかもしれません」
コレットちゃんとジーナの言う通り、どれもなかなかいける。

元の世界では何度か作ったことのある手作りベーコンだが、この世界の肉で試すのは初めてだったので、うまくできてよかった。

「うおっ、どれもめちゃくちゃうめえ。俺はこっちの肉の方がいいな。漬け方についてはどっちか選べねえぞ……」

「僕もダナマベアのお肉の方が好きかな」

「私もそちらの方が好きですね。漬け方はどちらも同じくらいおいしいです」

「ホホ〜！」

カルラ、コレットちゃん、ジーナ、フー太の順にそれぞれ感想を教えてください。

「やっぱりダナマベアのお肉の方がベーコンに適しているみたいだな」

ワイルドディアの方も悪くないけれど、ダナマベアの方が旨いのはみんな同じ意見のようだ。ダナマベアの方が高級肉というのもあるが、ベーコンには適度に脂身のある肉の方が適している。ワイルドディアは赤身部分が多いが多かったから、それも関係しているのだろう。

漬け方は、個人的には塩漬けにした方がベーコンの塩気にムラがあって逆に好きだったりする。人間の舌は味にムラのある方がより差を感じられると聞いたことがある。

ふむ、手作りベーコンもいい感じだったな。それじゃあ焼き立てのパンとベーコンを使ってもう一品くらい作ってみるとするか。

「よし、できた」

「うわあくおいしいそうだねー！」

「ホホ〜♪」

パンを半分に分けて、焼いた厚切りベーコンの上に卵を落として作った目玉焼きを挟んだものだ。

シンブルだが、絶対に間違いがないやつだな。丸パンを半分に分けているから、見た目はハンバーガーみたいに見えるかも。

「っ！ これはおいしいです！ ふわふわのパンに、塩気のあるベーコンに、半熟の目玉焼きが抜群に合いますね！」

ジーナが興奮した様子で教えてくれる。

「このままでもおいしいけれど、塩コショウ、醤油、ソースなんかを掛けてもいいよ」
すごい勢いで一気に食べ切ってしまうそうなので、ここは味変の提案を早めにしておこう。

「そんじゃあ、俺はこっちのソースってやつを掛けてみるか……ドロツとして真っ黒でなんだから微妙だな。うおっ、味はうめえ！」

カルラはソースを見るのは初めてだった。やっぱりみんなと同じで最初はソースの見た目を微妙に思うらしい。確かにこっちの世界だと、ここまでトロミのついたソースや真っ黒な調味料なんかを見ない。

しかしソースは濃厚な味でいろんな食材に合う。

「お醤油を掛けてもいいね！」

「塩コショウも風味や香りが加わっていきますね！」

「ホー♪」

ここでもすでに割れているが、目玉焼きに何を掛けるか問題は、日本でもシビアな問題だ。他に

もケチャップやマヨネーズなどの派閥も存在する。

個人的には醬油派だが、今回は焼き立てのパンと塩気のある分厚いベーコンと一緒になので、シンプルにコシヨウを掛けて食べるのがいいかもしれないな。

焼き立てのパンとベーコンが食卓に加わるのは大きい。これで今後の旅がより楽しくなるだろう。

第二章 ノクターラの街

今日はいよいよノクターラの街へ入る。次の目的地の情報を集めつつ、ドラゴンの素材が売れるかの確認、食材の確保などやることは山積みだ。

「どうだ、これで大丈夫そうか？」

「ああ、大丈夫だよ。翼は外に出ちやっっているけれど、鳥人ちまうじんもいるし、隠しているよりもこっちの方がよさそうだ」

カルラにはアステラル村で購入した大きめの外套がいでうを着てもらおう。背中の部分には穴をあけているため、カルラの赤い翼は外に出ている。最初は翼も外套の中に入れてもらっていたけれど、背中がもっこりとしていて、余計不審に見えてしまった。

この世界には背中に翼の生えた種族もいるし、それなら堂々と翼は出してもらおうことにした。まあ、俺達が目立っているのは今更だしな。

入場税の銀貨二枚を納めて簡単なチェックを受けてから街の中へ入る。

チェックの際はカルラの外套も取らなければならず、衛兵の人達にはだいぶ驚かれた。他にも森

フクロウのフー太や黒狼族のコレットちゃんがいたことにも驚いていたな。

どうやら、この街ではそこそこ森フクロウや黒狼族について知られているようだ。それよりもカ
ルラが驚かれていたから、やっぱり龍人族はかなり有名ならしい。カルラには悪いが、街の中では外
套を着てもらい、真っ赤な髪や白い角を隠しておいてもらうとうとうしよう。

「オドリオの街と似たような雰囲気ですね」

「確かにね。これくらいの規模の街が普通なのかもしれないな」

ジーナの言う通り、この街はオドリオの街の雰囲気似ている。ロッテルガの街ほど大きくてに
ぎわっているわけでもなく、マイセンの街のように湖と接している特徴的な街でもない。こういっ
た街がこの異世界ではベーシックなのではないだろうか。

「いや、村なんかと比べると、ここだつてとんでもなくすげえぞ！ 街へ入るのは久しぶりだぜ」

「カルラはあんまり街へ入ったことはないの？」

「ああ、人が多い街だとたまに襲われるから、ほとんど入ってこなかったな。入るとしても小さな
村くらいだ」

「なるほど……」

龍人族というのは生まれつき持った力は強いらしいけれど、いろいろと大変そうだ。

「それじゃあ、冒険者ギルドへは俺とジーナで行つてくるから、少しの間だけ待っていてね」

「おう、了解だぜ！」

「うん、わかった！」

「ホーホー！」

この街の冒険者ギルドの場所を確認し、建物から少し離れた目立たない場所でカルラ、コレット
ちゃん、フー太といったん分かれる。さすがにこの全員で冒険者ギルドへ入るのは目立ちすぎてし
まうから、この中では比較的目立たないジーナと一緒にに行くことにした。

さすがにコレットちゃんとフー太の二人と別行動をするのは少し不安だったから、カルラがい
てくれてとても助かった。尾行なんかに気を付けて、できるだけ目立たないように行動するとし
よう。

無事にドラゴンの素材を換金できればいいのだが……

「いらつしやいませ、冒険者ギルドへようこそ」

「すみません、素材の買い取りをお願いしますのですが」

「はい、買い取りの窓口はあちらになります」

ジーナと一緒に冒険者ギルドへ入り、受付のお姉さんに教えてもらつて素材の買い取りをしてい
るカウンターへと並ぶ。

周囲には、防具を身に着けてゴツイ武器を持った冒険者達が大勢いる。中には歴戦れきせんの戦士という
風貌ふうぼうで、全身に古傷のある厳いつい男性冒険者もいた。格好よくて憧れるという思いもありつつ、や

はり俺はあの人達のように魔物と戦うのは無理だなど思ってしまった。

うん、俺には冒険者としての名声を手に入れてハーレムなんていう夢はないから、今のよう
らんびりと旅をすることができればそれで満足である。ちなみにどうでもいい情報だが、この国では
男女ともに重婚じゅうこんが可能なので、ハーレムを作ることは可能らしい。どうでもいい情報だが。

「お待たせしました。本日はどのような素材を買い取りましょうか？」

列が進み、俺達の番が来る。

列にはどう見ても冒険者には見えない街の人や商人みたいな人も少しだけいた。マイセン湖の近
くで会った行商人ぎやうしやうにんのヘーリさんのように、行商をしながら魔物を倒したり、村や街の人でも魔物
を狩ったりしたら、冒険者ギルドへ持ってくるのだろう。

それもあつてか、俺達は目立たず、冒険者達から絡まれることはなかった。

マイセンの街の冒険者ギルドと同じように、冒険者登録をしないと買い取り金額が多少安く
なってしまう。しかし、冒険者登録をするには試験を受ける必要があるし、定期的に依頼を受けな
ければならないので、やはり登録はなしだ。

「行商の途中で手に入れたこのレッドドラゴンの牙二本と鱗を四枚売りたいのですが、どれくらい
の金額になるか教えていただいてもよろしいでしょうか？」

考えていた通り、行商で手に入れたことにして、ドラゴンの素材の一部を差し出す。

「レッドドラゴンですか、それはとても珍しいですね。拝見させていただきます」

「お願いします。買い取った冒険者から聞いた話では小さな子供だったららしいですね」

冒険者ギルドのカウンターで鑑定をしている女性が驚いた様子だったから、慌てて付け加えた。

やはりレッドドラゴンはかなり珍しい魔物のようだ。いっぺんに素材を持ってこなくてよかったぞ。

「……本物のレッドドラゴンの牙と鱗のようですね。確かにそれほど大きな個体のものではないよ
うですが、それでも十分な質のよさです。牙一本が金貨十六枚、鱗は金貨八枚で、合計金貨六十四
枚でいかがでしょうか？」

「……なるほど、わかりました。そちらでお願いします」

少しだけ悩むふりをするのが、実際には相場なんてわからない。とはいえ前回タナマベアの素材を
売った時に聞いた話だと、冒険者ギルドは基本的にどの街でも魔物の買い取り価格は一定らしい。

もちろん素材の状態にもよるらしいが、そこその手数料を取られる分、ぼったくらればしない
ようだ。俺達からしたら、金額の交渉なんてあまりできないので、そちらの方がありがたい。

驚かれはしたが、これくらいの量ならそこまで大きな問題になることがなさそうではとじた。
急にギルドマスターと会ってくれとか言われたら困るところだったからな。

「お待たせ。無事に換金ができて、金貨六十四枚になったよ」

「うわあ、すつごいね！」

「おお、そりやすげえのか？」

「ホー？」

冒険者ギルドを出て、みんなと合流する。カルラ達の方も特にトラブルがなくて何よりだ。

金貨六十四枚という金額の高さにコレットちゃんは驚き、一方でカルラとフー太はどれくらいの価値があるのかわからないようだった。

「ダナマベアの時よりも遥かに高額でしたね。さすがにあれほどの強敵であればそれも当然かと思えますが」

ジーナの意見には俺も同意だ。

「そうだね。大金だけれど、俺も決して高いとは思えないよ」

小さいとはいえ、ドラゴンだからな。今回はたまたま燃料の爆発を使ってなんとかなったからよかつたけれど、空を飛んで、あんなプレスを吐くドラゴンなんて、普通の人に倒せるわけがない。

この異世界の冒険者がどれくらい強いのかはわからないけれど、少なくとも、ちょっと強いレベルの冒険者では歯が立たないだろう。

「みんなと共同で使う用に金貨三十九枚を俺が預かって、一人金貨五枚ずつは自由に使えるお金にしようね」

ダナマベアを買い取ってもらった時と同じように分配する。

カルラの働きが大きかった気もするが、カルラは均等でいいと言ってくれた。俺としてもみんな命懸けで頑張ってくれたので、そこに優劣をつけたくはなかったからな。

「わわっ、すっごいお金だ」

「ドラゴンの素材はまだまだあるから、この街では自分が気に入った物を遠慮なく買ってね」

コレットちゃんはまだ古着くらいしか買ってないからな。さすがにこれだけあれば自分の好きな物を買えるだろう。

ちなみに俺は酒やツマミなんかに使おうと決めている。ちょっとくらい高いお酒も購入してみようかな。

さて、このあとはお昼を食べてから宿を確保し、市場へいろいろと買いに行くでしょう。

とりあえずそこそこの宿を確保した。新しくカルラが旅の仲間に加わったので五人となったものの、フー太は俺と一緒にベッドに寝るといふことで四人用の部屋を確保する。

相変わらず男の俺と一緒に女性三人が泊まることになるのだが、キャンピングカーでも毎晩一緒なわけだし今更だな。

こちらは多少気にしているのに、みんなはまったく気にしていないようだ。

宿の人は俺達を見て多少困惑していた。今までのメンバーに外套を被った怪しい人物も加わったわけだし、それも当然か。

不審に思われつつも宿は借りられたので、そのあとは屋台を巡って昼食を食べてきた。そして、そのままこの街の市場へと移動した。

「うーん、屋台の料理はシゲトの料理に比べると、あんまし旨くなかったな」

「そうですね。ドラゴンの肉という素材のよさを差し引いても、シゲトの料理の方が遙かにおいしかったです」

「シゲトお兄ちゃんの料理はいろんな味がするし、焼いたり茹でたりするだけじゃなくて、いろんな食べ方があるもんね！」

「ホホーホー」

「昨日はおいしい肉を食べたばかりだから一層そう感じられるのかもね。それに香辛料や調味料の種類がたくさんあって気兼ねなく使えるからだと思っよう」

みんなは俺の料理を口々に褒めてくれるが、最近はずら、ドラゴンの肉、焼き立てのパンにベーコンなど、俺がこの異世界に来てからの間で、おいしさが上位に入る料理ばかりを食べていた。そのせいで、多少舌が肥えてしまっているのかもしれない。

「さて、次は買い物に行こう。食材とかはまとめて購入するから、その下見と各自で欲しい物を探そうか。みんなと一緒に回ろうね」

このノクターラの街には特に観光地はないらしいし、明日には次の街へ向けて出発する予定だ。人数も増えたことだし、食材もより多く買わないといけない。一度買い込んだらどこか人目の付かないところでキャンピングカーを出して、アイテムボックスに入れておかないと。

冒険者ギルドでは少しだけ別行動をしたが、基本的には全員で行動をする。分かれて行動をして

いる時に襲われたら大変だ。

カルラが加わって俺達が狙われる可能性は増えたかもしれないけど、その反面カルラは強いし安全性は今まで以上となった。

これまで以上に周囲を警戒しつつも、楽しみながら市場を回っていくとしよう。

「へえ〜いろんなもんが売っているんだな。あれもこれも欲しくなっちゃまうぜー」

カルラは人が多くいる場所にはあまり行かなかったようだから、入ってすぐは市場の人の多さに驚いていた。そして、自由に買い物をするということが楽しらしく、テンションがかなり上がっている。

「あんまり遠くに行かないようにな。あと、さつき渡したお金の使い道は自由だけれど、他の街にも行くことだし、ここであんまり使いすぎない方がいいぞ」

「ああ、わかっているって」

確かにいろんな物が売っている市場を回るのは楽しい。俺も新しい街の市場へ行った時はテンションが上がるし、それが久しぶりのカルラはより楽しいだろう。

ちゃんとした商店もあるが、シートを敷いたところに商品を置いてあるだけで、値札さえもないようなお店もある。元の世界のフリーマーケットに近い感じかもしれない。

カルラはあちこちのお店に目移りしている状態だった。

「僕もせっかくなら何か買ってみようかなあ」

コレットちゃんもこれだけいろんなお店を見て、気になるものが見つかったのならいいな。

「そうだね、お金は持っているだけじゃなくて、何かに使った方がいいよ。新しい服とかもいいんじゃないかな？」

「うーん、僕は古いのがあれば十分かな」

せっかくならこの機会に新しい服でもと思ってすすめてみたのだが、必要ないらしい。この世界で旅をしていると、着飾るよりも実用性のある服の方がいいのは確かだ。

「普段使う小物だけ買って、あとは何か欲しい物があった時のためにとっておくね」

「……うん。もしもお金が足りなかったら相談してね」

コレットちゃんはまだ幼いのにしつかり者だ。本当に欲しい物だけを選んで購入している。

この辺りは性格が出るよな。俺は自分が欲しい酒やツマミなんかは結構買っちゃうタイプだけれど、それ以外は必要最低限しか買わない。

「ホー！」

フー太は食べ物しか欲しい物はないみたいだ。他の街では魚卵や果物なんかを買っていたな。あとで市場の食べ物売っている場所にも行ってみよう。

「シゲト、あとで鍛冶屋に寄ってみたいです。そろそろ少し本格的な剣の手入れが必要かもしれないせん」

ジーナが手を挙げて言ってくる。

「ああ、了解だよ。俺の方もこの前壊れちゃった予備のタンクを鍛冶屋で作ってもらいたいんだよね」

レッドドラゴンと戦った時に破損してしまった金属製の燃料タンクは、さすがに使い物にならなくなっていた。今後も予備の燃料が必要になったり、ないとは信じたいが燃料を武器として使ったりすることがあるかもしれない。

アイテムボックスに収納しておけば大丈夫だとは思いますが、燃料はちゃんと気密性の高い容器に入れておきたい。そのために鍛冶屋で作ってもらうつもりだ。

市場で買い物を終え、食材を購入する前に鍛冶屋へとやってきた。

この鍛冶屋は、街の中ではそこそこ大きな鍛冶屋のようだ。街一番の鍛冶屋はオーダーメイドの武器や防具などを主に扱っており、一見さんはお断りな感じらしい。

ジーナのロングソードの手入れとコレットちゃん用の武器や防具、そして燃料タンクを作ってもらえそうな鍛冶屋を探した結果、この鍛冶屋となった。

「いらっしやいませ。本日はどのようなご用件でしょうか？」

鍛冶屋へ入ると、受付のお姉さんが出迎えてくれた。異世界の鍛冶屋だと店員さんはドワーフのイメージが強かったのだが、受付はそうでもないらしい。とはいえ、鍛冶屋の奥の方にはちらほら

と背が低くて髭を生やしたドワーフの姿が見えた。

受付のお姉さんは大したもので、俺達の姿を見てもあまり動揺した様子はなかった。もしかすると、俺達よりもいろんな冒険者のお客さんが来るのかもしれない。

「武器の手入れをお願いしたいのと、これくらいのサイズで金属製の、液体がこぼれない気密性の高い容器が欲しいのですが」

俺は早速受付のお姉さんに要望を伝える。

「承知しました。武器の方はどのような物でしょうか？」

「これです。軽く研いではいるのですが、少し調整をお願いします」

ジーナがロングソードを渡す。もちろんジーナは日々手入れをしているが、それでもたまにはメンテナンスをしないとイケない。ハーキム村にいた時は武器の手入れに詳しい人がいたようだ。

「はい、承知しました。金属製の容器とはどういったものでしょうか？」

俺は受付のお姉さんに燃料タンクの概要を伝えた。

肝心の容器の蓋の部分だが、ペットボトルの蓋のようなキャップについてはまだこの世界にはなかったたので、コルク製の蓋となった。考えてみるとペットボトルの回すだけで中の水がこぼれないようにする技術はとてすごいよな。

コルクの蓋でも、ちゃんと閉めれば気体すらほとんど通さないだろう。

「かしこまりました。ロングソードの手入れは数時間で可能で、容器の方は数日かかると思います

がよろしいでしょうか？」

「えーと、もし特別料金とかで早くできるのなら、それをお願いしますのですが」

「はい、おそらく可能だと思うのですが、念のため確認してまいりますね」

そう言うとお姉さんは受付を離れ、お店の奥に入ってしまった。職人さんとスケジュールの確認をしているのだろう。

みんなには事前に話していたが、可能ならば多少お金をかけてでも時間を短縮したい。この街の付近に何か観光できる場所があればいいのだが、残念ながらそういった場所はなかった。

ジーナが護衛をしてくれるのもあと半月を切ったわけだし、今まで以上に一日一日を大切にしていかなければならないから、早く次の場所を目指したい。お金に関しては高く売れるレッドドラゴンの素材が手に入ったのはラッキーだったな。

「お待たせしました。大丈夫です。優先して明日の昼くらいまでに仕上がるように調整させていただきます」

戻ってきたお姉さんがそう言ってくれた。

「はい、お願いします」

よかった。それなら明日の午後にはこの街を出発できる。

「それではロングソードの調整はこちらでお願いします」

そのまま別の人に案内されて、俺達は鍛冶屋の奥へと案内される。

そこには、少し背が低くて髭を伸ばしたドワーフの男性がいた。

「……ふむ、しっかりと手入れが行き届いているようじゃな。これならすぐに終わるぞ」

「本当ですか、よかったです！」

やはり日々のメンテナンスは大事らしい。

調整なので、さすがにイメージする鍛冶とは違って、鎚を振るうわけではなさそうだ。もしも炉に火を入れて鎚を振るうようなら見てみたかったけれど、今回は刃や柄の調整だけらしい。

その間にこの鍛冶屋で販売している武器や防具を見せてもらうことにした。

「やっぱり武器や防具は食材とは値段が違うなあ。全部揃えるのはちよつと無理そうか」

予想通りというべきか、かなりのお値段だった。

可能ならみんなの防具なんかも揃えたかったのだが厳しそうだ。レッドドラゴンの素材をすべて売ればいけるが、面倒ごととは避けたい。

「俺は武器と防具は特に必要ねえな。むしろ重いもんを着てたら邪魔になっちまう」

「なるほど」

カルラの戦闘スタイルでは、防具なんかは不要なようだ。たぶんフー太もそういった物は不要だろう。

「コレットちゃんの護身用の防具とナイフは欲しいところだな。あとは大きな盾の一つくらいあってもいいかもしれない」

「僕の方は、大丈夫だよ」

コレットちゃんは遠慮気味にそう言う。

「いや、少なくとも胸当てなんかの防具はあった方がいいんじゃないか？」

レッドドラゴンと戦った時もそうだが、非常時にクマ撃退スプレーをコレットちゃんにお願いすることがあるかもしれない。その際に胸当てがあるだけでも、安全性がだいぶ変わるはずだ。

そして俺も武器は不要だが、コレットちゃんやみんなを守るための大きな盾くらいは欲しいところである。

「シゲト、剣の整備が終わりました」

「おつ、了解」

あつという間にロングソードの整備が終わった。日々使っている武器や防具のメンテナンスは大事だからな。キャンピングカーには『自動修復機能』があるとはいえ、整備や洗車を怠らないようにするとしよう。

「日々のメンテナンスは今まで通りで大丈夫じゃな。たまにどこかの鍛冶屋に持ち込んでやるくらい」

「ありがとうございます。バリン殿」

ジーナが剣をメンテナンスしてくれたドワーフさんにお礼を言う。あの人の名前はバリンという